

ラフマニノフ: パガニーニの主題による狂詩曲 作品43

ロシアの貴族の家系出身だったセルゲイ・ラフマニノフ(1873~1943)は、1917年にロシア革命が起こると、パリを経て、アメリカに渡った。亡命後、作曲を中断していたが、1926年によく再開してピアノ協奏曲第4番を書き上げ、1934年夏にスイスの別荘でこの「パガニーニの主題による狂詩曲」を完成させた。「パガニーニの主題」とは、パガニーニの無伴奏ヴァイオリンのための「24のカプリース」の第24曲の主題のことを指す。この「狂詩曲」は、序奏と主題と24の変奏曲(ほとんどが1分にも満たない短いもの)とコーダからなり、グレゴリオ聖歌の「怒りの日」の旋律も用いられている。「怒りの日」の旋律は、ラフマニノフにとって強迫観念というべきもので、交響曲第2番、交響曲第3番、交響的舞曲などでも用いられている。

短い序奏に引き続き、主題提示に先立って、第1変奏が奏でられ、そのあと、ヴァイオリンが「パガニーニの主題」を提示する。そしてそのまま第2変奏に入り、独奏ピアノが「主題」を奏でる。第7変奏で独奏ピアノに「怒りの日」の旋律が現れる。第10変奏では「主題」と「怒りの日」の旋律が絡み合う。第16変奏でヴァイオリンのソロが入る。第17変奏は第18変奏への橋渡しのような音楽。全曲中の最大の聴きどころである第18変奏は3分近くを要する最も長い変奏。ラフマニノフらしい甘美でロマンティックな旋律が聴ける。コーダでオーケストラが「怒りの日」の旋律を強奏し、最後に独奏ピアノが奏でる「主題」の断片で全曲が締め括られる。

ムソルグスキー(ラヴェル編曲): 組曲「展覧会の絵」

モデスト・ムソルグスキー(1839~1881)は、19世紀後半、ロシア国民音楽の確立に努めた「5人組」と呼ばれる作曲家たちの一人。組曲「展覧会の絵」は、39歳の若さで亡くなった、画家でムソルグスキーの友人でもあったヴィクトル・ガルトマンの追悼のために、ピアノ組曲として1874年に作曲された。この作品では、それぞれの絵が個性的に音楽化されているほか、絵と絵をつなぐ間奏曲として「プロムナード」(「散歩」を意味する)が入る。指揮者クーセヴィツキーは、このピアノ組曲のオーケストラ版への編曲を、フランスの作曲家で、管弦楽法の大家モーリス・ラヴェルに依頼した。編曲は1922年に行われた。

まず「プロムナード」がトランペットによって朗々と歌われる。「グノーム」は地価の宝をまもるこびと。「古城」ではサクソフォーンがしみじみと物悲しい旋律を歌う。「チュイルリーの庭」はチュイルリー公園ではしゃぎまわる子供たちの姿。「ビドロ」では、チューバが重々しい旋律を吹き、牛車がゆっくりと進んでいく。「卵の殻をつけたひなの踊り」はひなどりを模倣する。「サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ」は、金持ちのゴールデンベルク(威圧的な音楽)と貧乏なシュムイレ(弱音付きのトランペット)。「リモージュの市場」は、市場でおしゃべりする女たちの様子。「カタコンベ」は古代ローマの地下墓地。「鶏の足の上に建つ小屋(バーバヤガー)」のバーバヤガーとはロシアの民謡に出てくる奇怪な小屋に住む妖婆のこと。「キエフの大門」はロシア正教の聖歌にもとづく壮麗な主題で始まる。最後はプロムナードの主題が鮮やかに浮かび上がり、鐘が打ち鳴らされて、壮大に全曲が締め括られる。

ラヴェル: 「ボレロ」

クラシック音楽の作曲における最大の関心事は、「主題とその展開」にあるといいたいだろう。主題を提示して、それをどう展開し、発展させていくのか。バッハもハイドンもベートーヴェンもブラームスもみんな、そのことに腐心した。主題を転調し、装飾を加えながら、作品を書き上げていった。その端的な例が「変奏曲」という形式である。モーリス・ラヴェル(1875~1937)の「ボレロ」が音楽史上、最もユニークな作品の一つである理由は、クラシック音楽で最も大切にされるはずの主題の展開や転調がなされず、延々と同じリズムの同じ旋律が繰り返されることにある。変化は、楽器の組み合わせと非常に息の長いクレッシェンド(音量の増大)のみ。しかし、その巧みなオーケストレーション(管弦楽法)は、同じ主題が何度繰り返されても、聴き手を飽きさせることはない。それどころか、主題の繰り返しこそが聴衆の興奮を増幅させていく。なんと大胆で野心的な作品なのだろう。まさにラヴェルの「魔術」である。

まず、小太鼓のボレロのリズムに乗って、フルートが有名な主題を吹く。そのあと、この主題に応える副次主題も現れ、結局、この2つの主題が延々と繰り返されていく。そして、長い長いクレッシェンドが頂点を迎えたところでいきなり転調し、なだれ落ちるように終わる。1928年、舞踊家イダルピンシテインの依頼を受けて作曲され、彼女の率いるバレエ団によってパリ・オペラ座で初演された。もともとバレエ音楽として作曲されたが、今は管弦楽作品として人気を博している。

山田治生